

## スリランカの視覚障がい者支援の社会的企業 — Thusare 指圧院の活動に関して —

飯田 謙一

### 1、はじめに

専修大学社会科学研究所の2018年度春季合宿調査が、2019年2月28日から3月9日までの10日間、スリランカ国を訪れ実施された。我々一行は2月28日（木）、午前成田空港を出発、10時間ほどの空の旅の後、同日夜スリランカのカトゥナーヤカ国際空港に到着した。その夜は、空港に近いネゴンボ市の美しい海岸近くのホテルに宿泊した。翌3月1日（金）の早朝7時30分ホテルを発って、南国特有のヤシの木の間を走る国道を北上、途中昼食と休憩を取りながら、コロンボから396キロ離れた、ジャフナ半島の中心に位置するジャフナ市に移動した。ジャフナ市では、ジャフナ大学のProfessor R. Rajeskannan氏と、同Jeevasuthan. Subramaniam氏から、スリランカの過去における、中央政府と地方自治体の政治的な対立の歴史、それに対して過去において実施された対応策、並びにスリランカの歴史、さらに今日の政治の現状、今後スリランカで実行されるべき対応策などに関して、詳細な報告と解説を受けた。その上で今後スリランカが抱える課題などに関しても、詳しい説明を受けた後に、今回のお2人の報告に対して、質疑応答が活発に行われた。

翌3月2日（土）、早朝ホテルを出発して、仏陀が訪れたと伝えられているナーガデーパと称する小島に艇船に乗って渡り、仏陀の来訪に因み建立されたナーガデーパ・ウイハラ仏教寺院と、隣接したヒンズーウ教のナーガデーパ・プーシャニ・アンマン寺院を訪れた。その時、当日その寺院内部で行われていた、ヒンズーウ教特有の宗教儀式を見学することができた。その後ジャフナ市に戻り、ジャフナ市で最も重要なヒンズーウ寺院の一つである、ナッルール・カンダスワミ・コーヴイル寺院を訪れて、内部で厳かに行われていた宗教儀式を見学した。この寺院でも現地特有の宗教儀式を見る機会があり、現地タミル人の宗教に対する、特有な行動様式に接する貴重な体験をした。その後、我々は1933年イギリスの支配下にあったときに建設され、スリランカ内戦の前には、9万冊を超える蔵書を所有、アジアの中でも最大級の図書館の一つに数えられていたが、1981年にシンハラ人過激派により建物が焼き払われ、その蔵書の殆どを焼失した。後に2001年に建物の修復作業が完成した、テイルジャフナ図書館を訪れ内部を見学し、職員から懇切な説明を受けた。説明を受けた折に、外部からガラス戸越しに見えた書庫内の蔵書の数は本当に少なく、戦乱により貴重な蔵書や、資料を失ってしまった彼らの

無念さが感じられた。図書館の見学を終了した後、次に1618年ポルトガルによって建設され、その後18世紀オランダにより支配された後、さらにイギリスの手に移り1948年まで支配された後、スリランカ政府軍の管理下に置かれて、その後さらに1986年から95年には、LTTEが軍事拠点として利用していたと言われる、ジャフナフォート（要塞）を訪れた。その時夕刻の真紅に燃えた太陽が沈む時刻であったため、真っ赤な日没の陽光で、全ての景色が朱色に染まった、美しい光景を目にすることができた。夕闇の中ジャフナ要塞を見学しながら、この国が今日までに辿った悲しい歴史の物語を筆者は想像しながら、一抹の哀愁を感じた。

3月3日（日）、様々な想いで過ごしたジャフナ市を後に、我々は次の訪問先であるアヌラーダプラへ向かったが、その地へ移動の途中、2004年12月26日スリランカを襲ったインド洋大津波により、死者4万人という多大な被害出し、今日でもその時の津波の生々しい爪痕が諸所に大きく残る、ジャフナ県バアダマラッチ郡ウドトゥライ村を訪れた。その地はパルシックと称する日本のNGO団体が、住民に対して様々な支援活動や、技術指導をしている地域の中の一つで、現地の女性達の生計支援を目指し、現地の主婦や女性の日々の生計の向上が可能になるよう指導している活動。具体的には、現地スリランカ全土の女性が日常着用する衣服であるサリー、その中古となった生地を集め、それを再活用して様々な袋物やスカーフなどを生産、それら製品を販売することにより、現地の主婦や女性達が、現金収入を得られるように活動を立ち上げて、現在も継続して支援活動を行っている村を訪問した。そこでは、現在もその活動を活発に続けている村の主婦や女性達から、その活動が彼女たちの日々の生活にとり、大切な要素となっている事実。そして彼女たちが日々の生活をしていく上で、この活動が重要であること。また現在の活動状況に関しても、参加者全員から直接話を聴くことができ、大変有意義であった。この活動は、今日スリランカの各所で活発に行われており、彼女たちが家計を維持していくうえで必要不可欠な存在となっていることを知って、日本のNGO・NPOの活動が、現地で大変役立っている現実の姿に、直接接することが出来て良かった。そして同時に、この有意義な活動が今後も長く継続して行くことを願った。

村を後に一路アヌラーダプラに向かって旅を続け、夕刻近くにアヌラーダプラに到着した。アヌラーダプラは1000年以上にわたって、断続的にシンハラ王朝の首都であった町である。そのことから、スリランカ仏教の中心として存在していた土地であった。そのためにインド本土から仏教普及のために運ばれ、この地に植樹されて、現在ではその子孫にあたる聖菩提樹（スリー・マハー・ボーデイ）が、美しく緑を保っている有名な寺院がある。我々がアヌラーダプラに到着したのは夕刻であったが、かなり多くのスリランカの人々が、そのスリー・マハー・ボーデイ寺に参詣に訪れ、熱心に読経をしながら祈りを捧げている姿を、目の当たりにすることが出来た。筆者は改めてスリランカの仏教徒の宗教心の強さと、人々の仏陀に対する信仰の

強さを実感して感動を覚えた。そして同時にスリランカの人々が、日々幸せに生活を送れるようにと、心の中で手を合わせて祈った。訪れた日は特別な仏教行事と重なっていたために、多くの仏教徒信者が全国からお参りに訪れていたことを、案内のガイドの説明で知った。

菩提樹寺を参拝した後、純白の巨大なパゴダ、ルワンウエリ・サーヤ大仏塔を訪れた。そこでも多数の人々が参詣に訪れて祈りを捧げていた。特別な願い事のためか、楽器を打ち鳴らして大仏塔の周囲を、熱心に祈りながら行進する人々の姿もあった。夕闇の帳が徐々に降り、少し薄暗くなってきたが、日没の陽光により赤く染まった景色の中で、白く聳え立つ巨大な大仏塔の姿には、当時の支配者の権力の大きさと、仏教信仰の厳かな雰囲気漂っていた。

菩提樹の寺院や、純白でひとときわ高く聳えた巨大なパゴダを訪れた後、当日宿泊するホテルに移動した。ホテルは広大な敷地全体が、多数の樹木に覆われた公園のようになっており、その中に cottage 風建物が数棟ずつ分散して建てられていた。そのためにゆったりした雰囲気が漂い、長旅の疲れを癒してくれた。

3月4日(月)、スリランカに最初に仏教が伝えられ、この国で最も重要な聖地の一つとして、多くの巡礼者が訪れると言われているミヒンタレーを訪れた。ミヒンタレーは、インドのアショカ王が王子と王女を、当時スリランカを支配していた、シンハラ王朝のテイッサ王のもとに送り、王を説得して仏教への帰依を促した。テイッサ王が仏教の受容を決意したのがミヒンタレーの丘で、そこに最初の仏寺や仏塔が建立された。そのためにミヒンタレーは仏教伝来の聖地とされ、仏教を普及するために多数の僧侶がこの地域に集まり、居住していたと言われている。多数の僧侶が生活するための食事や、沐浴のために水利の確保が必要とされたので、ミヒンタレーには優れた灌漑施設が建設された。近年、その当時の灌漑施設が発掘され、当時の優れた灌漑建設技術を直接に見学できる場所である。

古代の灌漑施設や仏教遺跡を見学した後、山頂にある仏教寺院を訪れ、岩山の頂きから周辺に多数の灌漑池が広がる、美しい田園の景色を眺めることが出来た。

3月5日(火)、アヌラダプラを早朝に発って、次の目的地のシーギリアへ移動した。シーギリアには巨大な岩の上に、シンハラ王朝のカッサパ1世により建設された城の跡があり、その城跡からは遥か遠方まで、広く周囲を見渡せる遺跡である。そして麓には日本の援助で建設された博物館があり、有名な壁画が展示されている。

3月6日(水)、午前にマータレー市で陶器の生産を大規模に行い、世界的にも高級陶磁器の生産企業として知られている、日系企業のノリタケ株式会社を訪問した。当日多忙の中、日本から派遣され現地企業の指揮を執る社長はじめ、同じく日本から派遣されている管理者の方々から、会社が現在の安定した経営状態に至るまでに払われた、様々な努力に関して説明を受けた。その後、大規模な工場内で1200人の従業員が、様々な生産活動を行っている現場を見学し

たが、大規模な生産活動が整然と行われている清潔な工場と、現場で熱心に働く現地人従業員の作業状況を、興味深く見学することができた。

同日午後は、仏歯寺で有名なキャンデイ市内にある工場団地内で活動する、スリランカとアメリカ・イギリス・ドイツの合弁で運営されている、LINEA CLOTHING 社の大規模な現地縫製工場を見学した。この大規模なアパレル生産工場では、最新の設備や機械を使用して生産が行われており、多数の現地人従業員が、日本国内の大規模な縫製工場と同じように、活発に生産活動を行っていた。その工場は我が国の同種の工場と全く遜色がなく、最新の裁断や縫製の機械や設備が導入されており、現在の日本の大規模な縫製工場と同じように生産活動を行っていた。筆者は我が国と同じような近代的な縫製工場が、スリランカで稼働している姿を目の当たりにして驚きを感じた。工場見学の後キャンデイ市内を通り、中央高地山岳地帯で栽培されている茶畑が一面に広がる、ヌワラエリア地区に移動した。その地域はスリランカ紅茶の生産地で、宿泊したホテルの周囲には茶畑が一面に広がり、甘い茶葉の香りを含んだ新鮮な空気が漂い、また大変美しい景色が遠方にまで広がっていて、しばし絵画の世界にいるような錯覚にとらわれた。

3月7日(木)、朝ホテルを出発した我々一行は、さらに高い山岳地帯の山頂に近い場所まで移動して、周囲一面茶畑に囲まれた場所で、紅茶を大規模に製造している製茶工場を訪れた。スリランカの紅茶は、<sup>注1)</sup>セイロン紅茶のブランドで世界的にも有名で、この国の主要な輸出品となっている。そのセイロン紅茶の工場では、現地ガイドの案内で紅茶の製造過程を見学した。工場見学を終了した午後、我々は山を下って、最後の目的地であるコロombo市に向け移動した。夕刻コロombo市に到着したが、あいにく夕刻の交通ラッシュの時間帯にぶつかり、車の渋滞が激しいコロombo市内を移動することとなった。コロombo市では事前に予約してあった、市内で現地人視覚障がい者に指圧を指導しながら、彼らの独立を支援している Thusare 指圧院を訪問して、まず初めに実際に指圧の体験を受けた後、経営者の石川氏から具体的にどのような指導と、支援活動を行っているかに関して、詳しい説明を受けた。このことに関しては、後の章で述べることにしたい。

3月8日(金)は、コロombo大学において、午前は元学長の W, D. Lakshman 教授から、スリランカ経済に関する講演を聴き、われわれ参加者と活発な質疑応答が行われた。さらに午後は、The Social Scientist's Association の B. Skanthakumar 氏から、スリランカにおける、トロキー主義に関する講演を聴き、講演終了後には、質疑応答や意見交換が行われた。コロombo大学訪問終了後、現地に在住し宝石の販売と加工を行いながら、スリランカ現地の職人の養成を行っている、大槻氏の宝石加工工場を訪問して、実際の指導現場を見学した。見学終了後、大槻氏から現地スリランカや、日本国内における氏の日々のビジネス活動に関してと、スリランカ人の

行動特性に関して、大変興味深い説明を受けることが出来た。

3月9日(土)午前、スリランカにおいて造船と修理を大規模に行っている、船舶製造修理業の尾道造船グループの現地法人、Colombo Dock Yard を訪問し、現地での船舶製造と修理に関して、懇切な説明を受けることができた。また現地造船業界の特性に関して詳しい説明を受けた後、新造船の建造現場やその他の修理現場を見学した。現地の最終日9日の午後、スリランカ合宿調査の仕上げを兼ねてコロンボ博物館を訪れ、スリランカの貴重な歴史的展示物を、ガイドの案内で興味深く見学することができた。博物館の見学終了後、ホテルに戻り帰国のための準備をした後、ホテルを checkout し空港に移動した。同日の夜、滞在期間中数々の有意義な体験と、思い出を作ることが出来たスリランカを發って、帰国の途に就いた。3月10日(日)、この度の全ての schedule を無事終了して、成田に全員そろって帰国した。此度は大変有意義で、数々の貴重な体験をすることが出来た合宿調査であった。

## 2、Thusare 指圧院の活動に関して

この度の合宿調査実施期間に訪問した各所において、多くの貴重な体験をすることが出来た。この度の訪問により、訪問先の各所で得ることが出来た貴重な体験、それに見聞できた様々な事柄に関して、筆者はそれらの事柄全てに関して、機会を見つけて詳しく報告をしたいと考えている。そして可能であるなら、それらの事を詳細に報告できる機会がある事を希望している。しかし、この小論だけでは、その全てに関して報告することは不可能である。そこで小論では特にその中から、Thusare 指圧院の活動に絞って、記述・紹介をすることにした。

さて、本稿で取り上げる Thusare 指圧院は、国際協力 NGO/NPO 法人、アプカスの代表を務める石川直人氏が、中心となって活動する団体である。石川氏は2005年から支援活動をスタートして、今日では多方面で積極的に活動を行っているが、Thusare 指圧院は、NPO ボランティア団体 APCAS の活動の一部である。名称の APCAS とは、この団体が目指している、各種活動を英語表記した際の頭文字を意味しており、①Action for (行動) ②Peace (平和) ③Capability (選択の幅) And ④Sustainability (持続可能性) の意味の頭文字を表したものである。またアイヌ語では「歩く」との意味で、「ともに歩く」ことを意味している。

それではまず初めに、ごく簡単に国際協力 NGO/NPO 法人アプカスの現在の組織と、その活動に関して紹介すると、2014年12月任意団体として設立され、2018年1月に NPO としての法人格を取得している。主な活動地はスリランカと宮城県などで活動を行っているが、日本国外の事務所はスリランカに置き、そこでの staff は日本人常勤2名、インターン1名、現地人常勤者は9名が、3か所の事務所で勤務している。また日本国内の事務所は函館市にある。また

東日本大震災支援事務所としては、主に災害発生時から2014年12月まで、そしてさらに今日でも活動を継続し、主に宮城県気仙沼市にも設置して活動をしている。

法人アプカスの主な活動分野は、①災害復興支援活動。②子供教育支援活動。③環境の保全や防災活動。④農業技術の向上支援活動。⑤障害者の支援活動。⑥建築・デザイン分野の支援活動。⑦ネットワーキング、調査研究活動などなど広範囲にわたっている。

さて、アプカスの日本における主な事業としては、東日本大震災復興支援活動として、各種プロジェクトの立案と実施（震災発生時より2014年まで）を行った。またスリランカにおける事業としては、主に地域開発事業、社会起業事業のプロジェクト管理を中心に現在活発に行っている。このようにアプカスは、日々スリランカと日本において精力的に活動を行っているが、アプカスの代表を務めている石川氏は、研究活動にも積極的に取り組んでいて、ネットワーキングを活用して調査研究にも従事し、現在は略農学園大学の農食環境群特任研究員としての活動も、精力的に行っているとのことである。

ところで石川氏は上述のごとく、幅広い分野において、日々精力的に様々な活動を継続し実施している。石川氏がなぜスリランカにおいて、視覚障がい者のために Thusare 指圧院を開設し、今日も異国において積極的に、この活動に精力的に打ち込んで頑張っているが、なぜこの活動をスタートすることになったのか。その契機について以下に述べてみたい。

まず初めに、石川氏がこの活動をスタートさせる契機となったのは、ある時スリランカ人の視覚障がい者と雑談をしていた時、スリランカ人視覚障がい者の口から、「この国では視覚障がい者が仕事をするチャンスなんてない」。「指圧？・マッサージ？そんなことは聞いたことがない」。また「この国では、視覚障がい者がそんなことするなんて無理だよ」との発言であった。我が国では視覚障がい者が、指圧やマッサージの仕事に従事することは、ごく当たり前の事となっており、視覚障がい者は pride を持って、その仕事に従事しているのに、なぜスリランカでは同じように考えられないのか？

石川氏の説明によると、現在スリランカ国には、視覚障がい者が公表されているだけでも、全盲者が15万人、弱視の者は40万人存在しているとのことで、人口の2.7%が、目に何らかの障害を持っている事実を聴かされた。これに対して国家は、これら視覚障がい者に盲人用の眼鏡を配布している。また現在農村部における視力検査体制の強化と、これらの人々に対して眼鏡の配布事業を実施している。この程度であることが明らかになった。

石川氏が問題をさらに詳しく調査してみると、この問題の背景には、スリランカ特有の要因が存在していることが明らかになってきた。

なぜ、スリランカでは視覚障がい者のための仕事がないのか。その大きな要因となっていると考えられることは、まず初めに、上でもふれたが、その原因として、①彼ら障害者に対する

理解不足と、差別が存在している。視覚に障害があるのであるから、人並みに働くことができない。さらに視覚障がい者は家族や親族、それに周囲の関係者が面倒を見なくてはならないとの考えが、強く存在していることである。②障害者に対して、彼らには適正にあった仕事がない。また仕事に就くために必要な training などの機会が提供されていない。③仕事があったとしても、目の不自由な彼らを雇用するために生じるコストを、負担することができない。彼ら家族の大多数の者は、自分と家族の生活を維持することで精一杯であり、十分な働きのできないものを、雇用する余裕などないなど、多種多様な要因が厳然と存在していることである。

次に、視覚障がい者自身目が見えない。また見えにくいことを理由に、自ら努力して仕事を探すと、仕事に就こうとする勤労意欲が低く、その結果、彼らは最初から働こうとする勤労意欲が極端に低い。また上でも述べたが、当事者、並びに家族が最初から視覚障がい者は働くことができないと考え、身内の者が彼らの面倒を見る。不幸な彼らにはお恵みを与えることを当然のことと考え、仕事をさせる機会を最初から奪ってしまっている。<sup>注2)</sup>

スリランカでは上に述べた如く、視覚障がい者が生活のために働く機会を求めても、それはかなり困難であるか、不可能に近い現実を知ることになった石川氏は、確かに最初に視覚障がい者から相談を受けたのを機会に、この課題を分析してみると、スリランカには職業訓練の場所は、現在わずかながら存在はしているが、働くための受け皿がほとんどない事実を把握した。そこで彼らを受け入れて、仕事をする機会を作り出す必要があり、そのことが重要であると考え、彼らが働く場所を創出する必要性を痛感した。

さらに石川氏は、我が国やタイ国など、それに東南アジアの他の国々を見てみると、技術訓練を受ければ、指圧、整体などマッサージなどが関連する職場が多数存在しており、働く機会を得ることが可能であることを知った。一方スリランカでは、アユルベーダなどの伝統的なマッサージが、古来から存在して活用されているが、その中には女性による、いかがわしいマッサージを活用した、いわゆる性的なサービス営業をしている店が存在している。そのことからスリランカでは、マッサージに対して偏見を持っている人が、多くいることが分かった。そこで石川氏は、いかがわしいという固定観念を払拭するために、正規のマッサージの技術訓練を受けた、視覚障がい者が働く指圧、マッサージサロン Thusare Talking Hands (以下、Thusare 指圧院) を設立して、2012年に「トゥサーレ」の運営を開始した。

石川氏によれば、スリランカにも職業訓練校は存在しているが、教える側の技術が未熟で、そこではプロとして通用する技術を、習得する事ができないことを知り、本格的な技術を習得させるために、日本人専門家<sup>注3)</sup>による技術指導を行うこと。また他の国からの指圧技術者の派遣依頼と、派遣などを積極的に行った。このようにして障害となっていた事項を克服する努力をした。

またこの事と同時に、技術訓練を受講した後。また技術を習得したとしても、就職する職場が限られているという困難な問題がある。すなわち障害者への偏見、指圧に対する知識不足。それに我が国などでは、障害者雇用促進法などの社会システムが存在しているが、スリランカではそのような法律が無いなど、指圧の市場が様々な障害にぶつかっているために、市場が思うように拡大しないという障壁が存在している。これらの障害に対して、Thusare 指圧院では、実在店舗の外での営業も独自に展開している。その具体的取り組みとしては、①Social Business Sector との連携をしている。具体的には Good Market と称する青空市場に、Market が開催される毎週土曜日に、継続的に参加して活動を行っている。また②各種イベントに積極的に出張参加をしている。すなわち学園祭、国際展示会、ホテル等でのシンポジウムが開催された際に、それらの会場へ出張するなど。またホテルや企業と連携して、様々な市場の拡大に現在も努力している。その他に③Office massage という方法で、国際的に活動している企業や、大規模企業にも積極的に指圧技能取得者を派遣して、これら企業の福利厚生プログラムとの連携を積極的に行っている。この Office massage に関しては、massage を受けた後の従業員の仕事の効率アップや、満足度アップなどに大いに役立っていることが分かってきた。また Office massage を活用している企業にとっても、視覚障がい者の雇用を促進するとか、支援をしていることは、結果的に企業の CSR、すなわち社会貢献活動にもなるなどの効果があり、これらの活動は受け入れ企業にとっても、かなり役立つ結果をもたらしていると、石川氏は述べている。

ところで、現在 Thusare 指圧院には①11名の視覚障がい者が、指圧師として働いている。また②Trip adviser と称する media が公表している SPA&Wellness 部門の 30 店舗の中で、評価は第一位の地位を獲得し、その地位を確保している。③顧客数では、月間 400 名が利用する状態に達している。④そして彼らは指圧の仕事を通して、経済的に自立運営ができるレベルにまで到達している。

石川氏が目指す Thusare 指圧院の今後の目標と夢は、スリランカの視覚障がい者が、指圧やマッサージの仕事に従事して、堂々と独立し自活の生活をする事ができるように。またそのことが現実に可能となるよう、スリランカ社会を変える。一歩ずつを“スローガン”に、現地政府と連携して、①指圧マッサージ師としての国家資格制度を確立し、技術習得者の社会的地位をより安定的にして、②より高い技術を体系的に習得する motivation を高めるために努力している。そして③今後 5 年間で、100 名のマッサージ師を養成する。そのために④研修施設の整備を図り、現在、壁が高い女性マッサージ師の養成にも、challenge したいとしている。このようなことを目標に、石川氏は希望と抱負を持って、スリランカ現地で日々積極的に活動をしている。

### 3、むすび

この度の専修大学社会科学研究所のスリランカ合宿調査に参加して、上で縷々述べたように、多種多様かつ貴重な体験をすることができた。これら全ての事柄に関して上でも述べたが、小論だけでは限られたスペースの関係で、それらすべてについて紹介することは、当然のことながら不可能である。そこで小論では上でも述べたが、今回は、特にその代表的な例として、Thusare 指圧院の活動、それらごく一部分だけを紹介することにとどまった。その他の貴重な多くの経験や体験したことなどに関しては、後日改めて執筆する機会を捉え、体験した多くの事柄に関しても紹介をしたいと考えている。小論で取り上げた Thusare 指圧院の活動に関しても、その一部についてのみ執筆することが可能であった。末筆になったが、此度スリランカでご多忙の中、懇切にお世話頂いた企業、並びに訪問してお世話になった皆様に、衷心よりお礼を申し上げます。

一人でも多くの方々が Thusare 指圧院、同種の組織の活動を、また我が国の様々な NPO が世界各国、各地で現在行っている活動に関心を持ち、これらの活動について、さらに詳しく知ることを希望するならば、是非直接にこの種の組織や団体、並びに石川氏に問い合わせることをお薦めしたい。また小論において詳しく紹介できなかった、NPO のパルシク<sup>注4)</sup>などの団体の活動に関しても、直接問い合わせるなら、活動に関して詳しく紹介を受けることが、可能であると筆者は考えている。

最後になったが、此度のスリランカ調査では事前研究会で、スリランカで長年にわたり調査研究、特にスリランカの灌漑に関する調査研究を専門にされた、現在龍谷大学研究フェローの中村尚司先生から、スリランカ国や灌漑に関して事前に詳しい説明を受けることが出来、また先生の著作を読ませていただいていたので、多少の予備知識を持ったうえで、スリランカ全土に多数存在している灌漑池を見ることが出来た。また古代に建設されたミヒンタレーの灌漑施設を訪れ、その灌漑技術が優れていたことを先生の説明を受けながら現地で見ることが出来て大変有意義であった。末筆になったが心から感謝している。

#### 注

- 注1) 1815年イギリスはキャンデイ王国を滅ぼし、中央高地を国有地化しプランターに払い下げた、その土地に茶ノ木が多く栽培されて、スリランカ紅茶の原料となった。
- 注2) スリランカばかりでなく、東南アジア諸国では障害者や生活困窮者に対して、家族や親族、また周囲の人々がお恵みを提供して、これらの人々を救済する考え方が強く定着しているようである。すなわち、彼らの社会では困窮者は周囲の人間が手を差し伸べて助けるという、互助思想が発達している。困窮者を見捨てるものは、許されないとの宗教的思想が強く浸透していると考えられる。
- 注3) 我々が Thusare 指圧院を訪れた折、遠く日本から技術指導を行うために、マッサージの専門家が来

ており、実際に懇切かつ具体的に現地人の指導を実施していた。

注4) パルシックは乾燥魚加工支援事業（ジャフナ県）、養殖事業、漁具配布事業、漁村のコミュニティ復興支援事業、淡水養殖導入事業。自立のための活動。など様々な支援活動を行っている。

## 参考文献

中村尚司『スリランカ水利研究序説』論創社、1988年。

田中瑛也『東南アジア仏跡の回廊を巡りて』たいせい社、1997年。

杉本良男、高桑史子、鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』明石書店、2013年。

地球の歩き方編集室『地球の歩き方』ダイヤモンド社、2018年。

石川直人「“Thusare Talking Hands” の取り組みのご紹介」powerpoint.